織田政権における「惣構」の特徴と展開

――織田信長とその家臣に関連する事例を中心に――

田　中　詢　弥

は　じ　め　に

本稿は，戦国期と織田政権期[1]における代表的な惣構[2]について，考古学や歴史地理学的な方法を用いて，平面プランと土塁・堀の構造から比較し，織田政権における惣構の特徴や展開を検討するものである。

惣構とは，図 1 に示したように，集落を囲繞・区画した堀や土塁であり[3]，天正 19 年（1591）の御土居構築を契機として，全国に展開したと考えられている。

城下町の発展や織豊政権との関係性を考える上で貴重な資料となる惣構の研究は，長らく城下町研究を中心におこなわれ，矢守一彦氏（矢守 1958）や千田嘉博氏（千田 2000），宮本雅明氏（宮本編 2000）の分類案などが発表されてきた。しかしながら，これらの研究は，惣構が囲繞する内部空間に着目したものであり，惣構を構成する土塁や堀の規模・構造についてはふれられていない。また，仁木宏氏は惣構が囲繞する方向から分類をおこない，畿内の城郭における惣構が，織田政権に影響を与えたと指摘している（仁木 2002, 2008）が，個別事例の評価に問題があるため，分類は十分に機能していない。

一方，個別の事例に関しては，一乗谷や有岡，勝龍寺などを中心に，発掘調査から惣構の構造が明らかにされつつあり，洛中における堀の比較をおこなった山本雅和氏の研究（山本 1996）などに発展している。また，歴史地理学的な研究の方法を利用し，小牧の惣構を復元した研究（千田 1989）もある。しかしながら，個別事例の発掘調査に携わった研究者の多くは，中世・近世の城郭を専門としていないため，研究の対象は各研究者が調査に携わった事例にとどまり，全

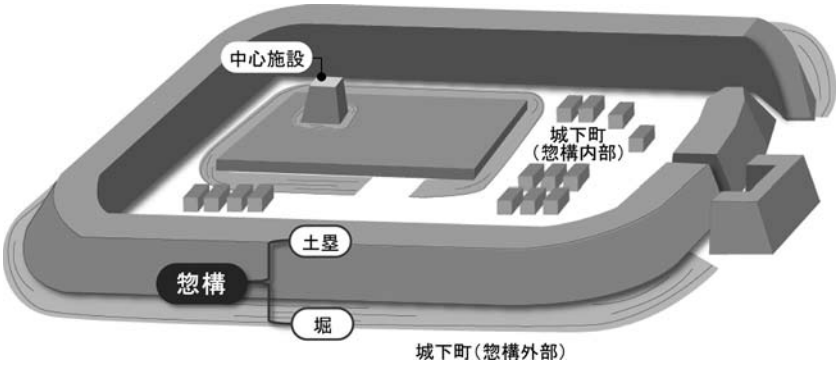


図 1　惣構概念図

国の惣構を対象とした研究はおこなわれていない。さらに，中世・近世城郭の研究者は城郭中心部を，城下町の研究者は城下町内部を研究対象としたため，惣構の土塁・堀はどちらの研究対象にも含まれず，研究は進展していない。

本稿では，このような研究史上の課題をふまえ，畿内[4]を中心とした地域における代表的な惣構を，平面プランから分類し，土塁・堀の規模・構造を比較検討した。その上で，従来とは異なる視点から惣構の特徴を明らかにし，戦国期・織豊期の城郭や城下町の成立と発展に大きく影響を及ぼした，織田政権の惣構の特徴について考察する。

1. 惣構の研究史とその問題点

日本には都市囲郭が存在しなかったと考えられていたため，惣構の研究は，戦前では小野均氏（小野 1928）などを除き，ほとんどおこなわれなかった。戦後は，一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査をはじめとした中世・近世の城下町に関する研究の増加と，高度経済成長にともなう全国的な発掘調査数の増加によって，中世・近世考古学が注目されるようになった。惣構に関するデータも蓄積されたことで，個別事例を中心に惣構の研究が進展した。

本節では，惣構の分類や惣構を構成する土塁・堀に関する先行研究を示し，その研究史上の成果と課題を検討する。

(1) 惣構の研究史

矢守氏の研究（矢守 1958）では，惣構の囲繞した範囲から城下町を分類している。この分類案は，一部が修正されながらも，今日の城下町研究の中心を担っている。

しかしながら，矢守氏の研究は城下町の分類を目的としており，惣構は分類の際の指標のひとつに過ぎない。結果として，惣構が囲繞した内部の構造には焦点があてられたものの，惣構の土塁・堀については十分な分析がおこなわれなかった。また，分類を通じて，中世・近世城下町の変遷などを検討することはできるが，近世的な身分が未だ不明確な織田政権期以前の事例[5]については検証することができないという課題も存在する。

千田氏は，城郭構造の変遷過程を矢守氏の分類と対応させ，城郭と城下町の関連性を検討した。その上で，出入り口型式と城下町を対応させることで，元和期に城郭と城下町の構造が大きく転換したと指摘している（千田 2000）。

仁木氏の研究（仁木 2002, 2008）では，惣構がどのように囲繞しているかを重視し，平面プランから研究がおこなわれた。その結果，360 度全体を囲繞した惣構は，有岡など畿内を中心に展開し，織田政権の事例では確認できないことから，畿内の影響力が織田政権よりも大きかったと評価している。

この研究では，惣構を囲繞の仕方で分類しており，その点は重要な成果であるが，個別事例の評価に問題があるため，十分に分類が機能していないと考える。具体的には，仁木氏が 360 度全体を囲繞した惣構と評価した有岡は，所在する地形を利用することで，一部にしか土塁・堀を構

築していないと推定されることから，人工施設でまわりを囲んでいたとは評価できない。このように，発掘調査の成果や地形を把握した上で，改めて分類をおこなう必要がある。

また，仁木氏の研究では，寺院や自治都市における惣構についても論じられているが，織田政権の惣構との関係性については具体的に述べられていない。そのため，城郭における惣構同士を比較するとともに，山科や上京・下京といった寺院や自治都市との関係についても検討する必要がある。

つぎに，惣構を構成する土塁・堀の研究は，考古学の視点から調査研究が進められた。ただし，いずれも惣構における事例を抽出した研究ではない。

西ヶ谷恭弘氏は，関東における土塁の構築方法を分析した。その上で，土塁の構築方法を，掻きあげ土塁，敲き土塁，版築状土塁，版築土塁，混合土砂版築土塁，削り残し整形土塁に分けた上で[(6)]，掻きあげ土塁から敲き土塁，版築・版築状土塁，混合土砂版築土塁へと変化したことを指摘している（西ヶ谷 1994）。西ヶ谷氏の研究は，関東の事例に限定されているが，畿内の事例や惣構の土塁を評価する上でも，重要な先行研究である。

山本氏による中世京都の堀の研究（山本 1996）では，堀が囲む対象と堀の立地から，居館・寺院を囲み，山間部に立地するもの（Aa 型式），平地に立地するもの（Ab 型式），上京・下京といった惣町の中を区画するもの（Ac 型式），集落・惣町全体を囲うもの（B 型式），主に水路としての機能を担うもの（C 型式）の 5 つの型式に分類している。居館・寺院や集落といった囲繞の対象施設による分類は，惣構を分類する上で重要な観点となり得ると考える。

宇留野主税氏による堀の研究（宇留野 2014）では，堀を断面形態から，断面 V 字状の堀 A，断面逆台形状の堀 B，断面逆台形状で底の広い堀 C，断面 V 字状で大型の堀 D，障壁のある堀 E に分類し，堀 A は 13 世紀～16 世紀の方形居館に見られ，堀 B は堀 C，堀 D へと変化していくことを指摘している。また，堀 C を改修した堀 D については，年代が限定できる堀と評価し，16 世紀後半に戦闘形態の変化によって急速に広まったとしている。

堀の構造から年代を検討できるため，重要な先行研究であるが，惣構を区別せずに研究されているため，惣構の分類には及んでいない。

(2) 研究史上の問題点

以上の先行研究から，惣構研究の現状の課題をまとめる。

①矢守氏の研究では，城下町の分類を目的としているため，惣構の構造には焦点があてられず，構築者の特徴を把握できない。また，惣構に囲繞された内部が不明の場合は，分類ができないため，近世的な身分制が未確立であるこの時期の事例には対応できない。

②仁木氏の研究では，文献史学だけでなく考古学の研究成果を取り入れている点で評価できるが，考古学的分析がなしえていない事例も存在し，畿内の事例の評価や織田政権の事例との比較が十分ではない。また，平面プラン以上の相違点・共通点を見出せていない。

③山本氏の研究では，居館・寺院内での分類がおこなわれず，大名と寺院勢力を比較することができない。

④土塁や堀による比較研究では，惣構を他の遺構と区別せずに研究されたため，惣構を分類し実態を解明する研究にまでは進展していない。

このような課題の背景には，中世・近世考古学による惣構の研究が個別事例にとどまり，全体の構造を比較した研究がおこなわれていないことがあげられる。

本稿では，これらの問題点を解決するために，城郭研究や歴史地理学の視点による平面プランから惣構を分類し，考古学的研究によって明らかにされた土塁や堀の規模・構造を比較することで，従来とは異なる視点から惣構について分析し，織田政権における惣構の特徴を明らかにする。

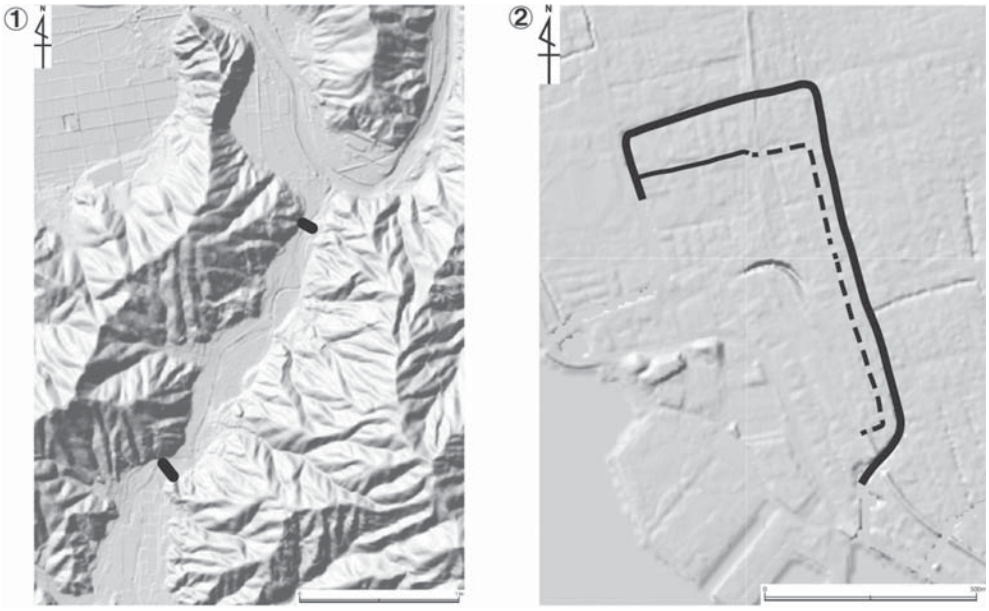
2. 惣構の分類

先行研究でまとめたように，これまで惣構の分類は，歴史地理学的な視点を中心に進められてきた。しかしながら，前節で整理したように，いくつもの課題を内包している。

そこで本節では，従来の研究を参考にしつつ，地理院地図を利用した分析をおこない，平面プランにもとづく惣構の分類をおこなう。

(1) 分類の視点

織田政権期における代表的な城郭や都市を抽出し，惣構の有無や分布をまとめ，その上で，各事例の先行研究から復元した平面プランをもとに分類をおこなう[7]。分類をおこなう上で，惣構を構築した集団による相違を表す必要があるため，まず，惣構の中心施設を分類した[8]。つづい



①人工施設が出入口周辺部を中心に存在している例（一乗谷）
②人工施設が周囲を囲繞している例（長浜）

図 2　人工施設の囲繞の例

て，惣構を構成する人工施設の囲繞の仕方から，図 2 のように①出入口周辺部を中心に存在している例と，②周囲を囲繞している例[9]に分けた。なお，平面プランの復元および惣構の構築年については，各事例の先行研究をもとに検討した。

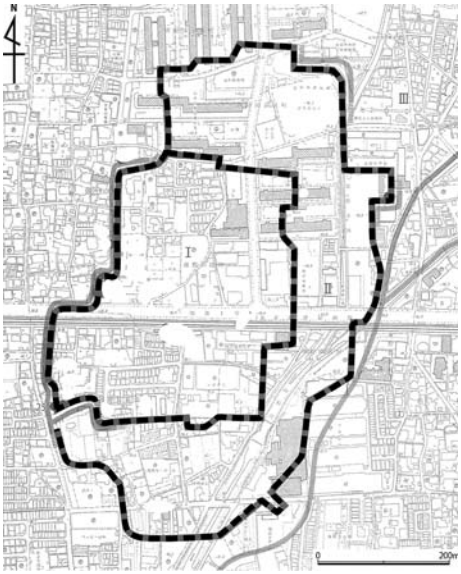


図 3　山科本願寺

(2) 分類

寺院型

寺院型は，寺院が中心施設となる惣構である[10]。寺院型は寺院型 A と寺院型 B に大きく分かれる。

寺院型 A は，人工施設の土塁・堀が出入口周辺部を中心に構築され，囲繞された範囲内に，寺院や寺内町が存在しているものである。事例としては，百済寺（滋賀県）などがある。

寺院型 B は，人工施設の土塁・柵・塀・堀が周囲を囲繞するもので，事例としては，東寺（京都府），本國寺（京都府），図 3 にあげた山科本願寺（京都府），大坂本願寺（大阪府）がある。

城郭型

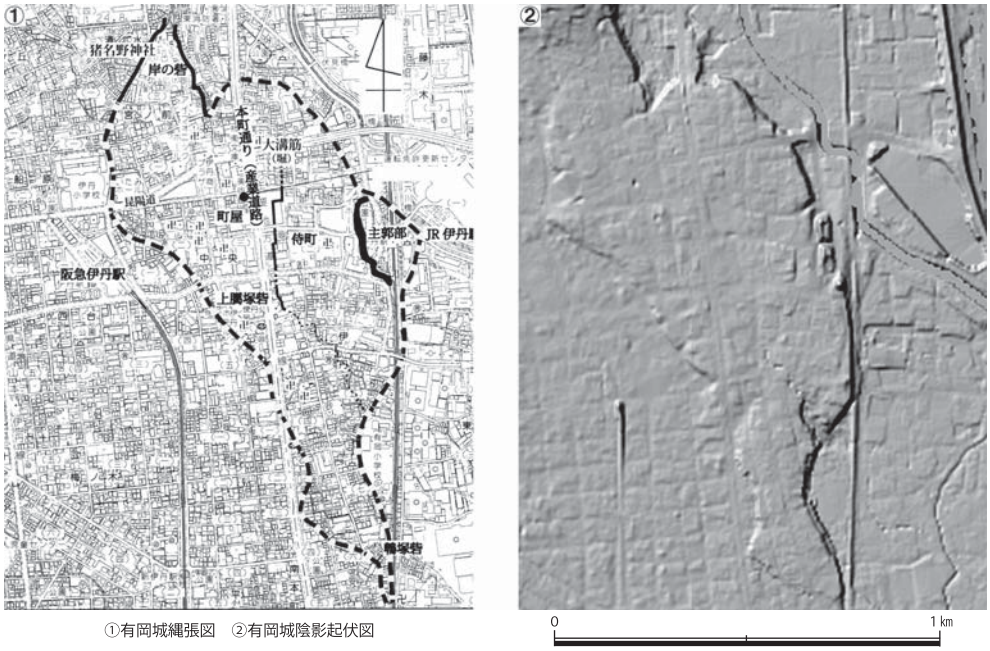
城郭型は，城郭が中心施設となっている事例である。

城郭型は城郭型 A と城郭型 B に大きく分かれる。

城郭型 A は，人工施設の土塁・堀が出入口周辺部を中心に存在しているものである。事例としては，一乗谷（福井県），小牧（愛知県），勝龍寺（京都府），安土（滋賀県），有岡（兵庫県）がある。発掘調査から，有岡や勝龍寺では滞水の痕跡が確認されず，空堀であったと考えられている。

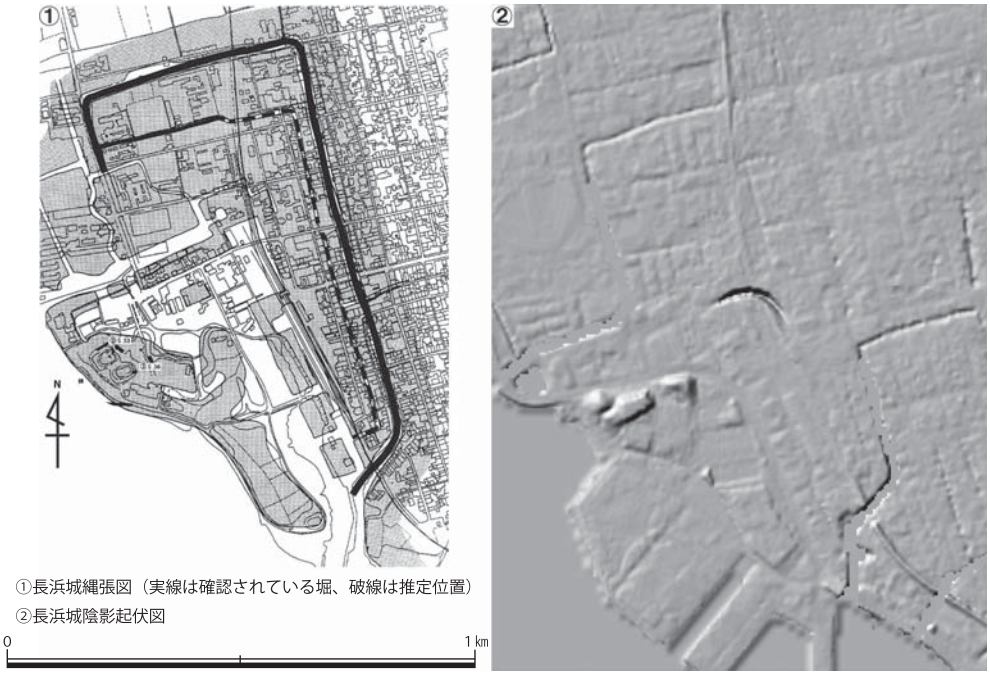
有岡城は，図 4①にあげた縄張図から土塁・堀といった人工施設が城郭と城下町の周囲全体を囲繞しているように見える。しかしながら，図 4②に示した国土地理院発行の陰影起伏図からは，崖面を中心に段丘を利用して惣構が構築されていたことが確認できる。発掘調査では段丘がつづく北西において土塁・堀の痕跡を検出した一方，周囲より標高の高い東側や西側の崖面には土塁・堀の痕跡がほとんど確認されていないことから，人工施設の土塁・堀の構築は最小限であったと考える。したがって，有岡城の惣構の人工施設は，出入口などの一部に限られるため，城郭型 A と評価する。同様の点は高屋（大阪府）や池田（大阪府）でも指摘できる。

城郭型 B は，人工施設の土塁・堀が周囲を囲繞するもので，事例としては，長浜（滋賀県）や高槻（大阪府）があてはまる。長浜や高槻では，河川などから水が常に流れており，水堀であったと考えられている（市立長浜城歴史博物館編 2002）。



①有岡城縄張図　②有岡城陰影起伏図

図 4　有岡城惣構



①長浜城縄張図（実線は確認されている堀、破線は推定位置）
②長浜城陰影起伏図

図 5　長浜城惣構

長浜城の惣構は図 5①のように城下町の周囲を囲繞していたと想定されている（市立長浜城歴史博物館編 2002）。図 5②の陰影起伏図を照合した結果，長浜城は平地に築かれており，段丘を利用したことで人工施設が一部にとどまる有岡城とは異なり，惣構の人工施設は周囲を囲繞する

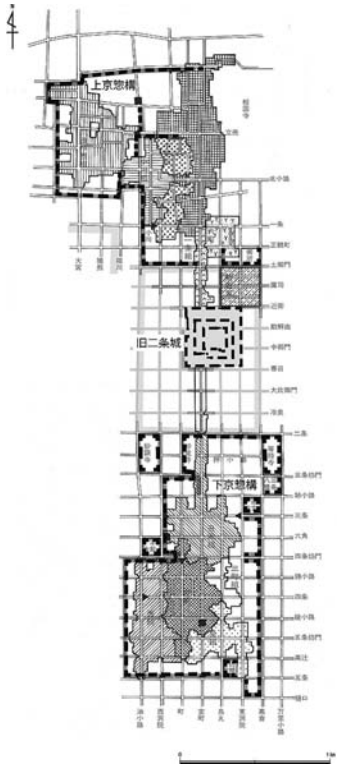


図 6　上京・下京惣構と旧二条城

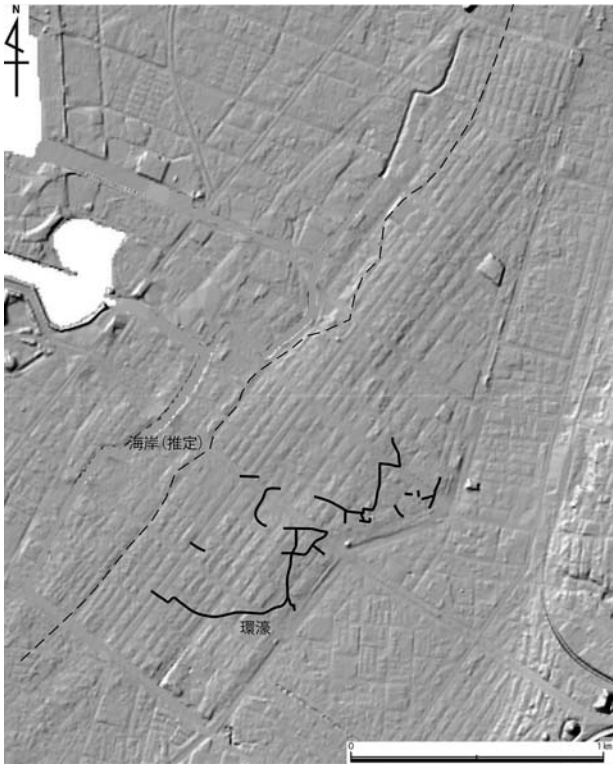


図 7　中世の堺

かたちで構築されていたと考える。

その他型

その他型は，寺院型や城郭型に比べ，中心施設が明確ではない事例[11]である。ただし，中心施設が存在しない事例とは限らない[12]。また，明確な中心施設が存在しない事例でも，上京・下京惣構のように幕府や町衆が中心となって構築しており，構築集団を検討することができるものもある。代表的な事例としては，図 6 にあげた上京・下京惣構（京都府）や図 7 に示した堺（大阪府）があげられる。

3. 分　析

本節では前節の分類にしたがって，惣構を構築時期や分布，平面プラン，土塁や堀の規模・構造といった観点から分析し，織田政権における惣構について検討する。表 1・2 は，畿内を中心とした地域における代表的な事例を集成したものである。表 1・2 では，まず各事例を所在地から畿内，東海，北陸に分け，先行研究にもとづいて惣構が存在した時期と惣構の構築年代を整理したのち，時系列に配置した。次に，惣構構築の際に中心となった勢力と前節で述べた平面プランによる分類，発掘調査によって確認されている土塁・堀の規模という項目を設定し，各事例の

特徴を整理した。以下，この表をもとに分析をおこなう。

(1) 惣構の構築年代による分布と平面プランの変化

本稿では，織田信長が足利義昭を奉じて入京したのち，旧二条城を築城した，永禄 12 年（1569）を境として，各事例が構築された時期を，戦国期・織田政権前期と，織田政権後期に分けた。

図 8 では表 1・2 をもとに，その他型を▲，文献史料から惣構が存在した可能性はあるものの，絵図資料や発掘調査からは構造が明らかになっていない事例を×，寺院型 A を■，寺院型 B を□，城郭型 A を●，城郭型 B を○とし，①戦国期・織田政権前期と②織田政権後期のそれぞれにおける分布を示した。

戦国期・織田政権前期までに構築された惣構では，次の特徴が見られた。

寺院型とその他型の構築事例が多く（14 件中 6 件），他の時期に比べ，城郭型の占める割合は少ない（14 件中 8 件）。

寺院や都市では，人工施設の土塁・堀が周囲を囲繞する事例を確認でき，城郭型では，城郭型 A の占める割合が高く（8 件中 7 件），城郭型 B の事例はほとんど確認できない。

東海と北陸における城郭型 A の事例としては，朝倉氏の一乗谷や土岐氏の大桑，斎藤氏の井口，織田政権の小牧が確認されている。表 1・2 に整理した各事例の構築年代をふまえると，一乗谷（15 世紀後半）・大桑（16 世紀前半）・井口（天文 8 年〔1539〕ごろ）といった先行する事例の影響を受けて，織田政権は小牧（永禄 6 年〔1563〕ごろ）に城郭型 A を構築したと推定できる。

畿内では，平地に寺院型 B が構築された一方，城郭型 B はほとんど確認できず，高屋や池田のように城郭型 A が構築されていることが特徴としてあげられる。

つづいて，織田政権後期に構築された惣構では，次のことが明らかとなった。

戦国期・織田政権前期では山科や大坂において構築されていた規模の大きな寺院型は，織田政権後期では確認できない。一方，城郭型の構築例は，戦国期・織田政権前期（14 件中 8 件）に比べ，増加している（22 件中 18 件）。その内訳としては，城郭型 B の占める割合が，河川・湖周辺の平地を中心に増加している（18 件中 8 件）。城郭型 A については，織田信長の拠点を中心に，戦国期・織田政権前期に引き続き構築されているが，城郭型に占める割合は減少している（18 件中 5 件）。

以上から，織田氏と足利氏が上洛し，旧二条城を築いた永禄 11～12 年（1568～69）ごろを境として，城郭における惣構の平面プランが変化したと結論づけることができる。

(2) 土塁と堀の規模・構造

織田政権期以前の惣構における土塁については，一部を除き，ほとんどの事例が豊臣政権期以降に破壊・改修を受け，当時の構造は不明瞭となっている。しかしながら，上京・下京惣構や堺の発掘調査では，堀が一方向から埋められていたことから，そのすぐ側に，堀を埋めるに適した

表 1　戦国期・織田政権期の惣構の構造（畿内）

名称	所在地	惣構の有無		構築年代（文献による）		中心勢力	平面プラン（縄張）による分類	土塁			堀				備考	参考文献
		戦国期・織田政権前期	織田政権後期	中心施設	惣構			高さ（m）	幅（m）	角度（°）	かたち	幅（m）	深さ（m）	角度（°）		
畿内																
東寺	京都府	○	○	9 世紀	15 世紀後半	真言宗	寺院型 B	−	−	−	−	−	−	−		中居 2014 b
上京惣構	京都府	○	○	−	15 世紀後半	−	その他型	−	−	−	箱堀	2.1	4	68	土塁の構造は不明。	石崎 2014 a，京都府埋蔵文化財調査研究センター編 2018
														66		
												2.7	3.5	75		
														79		
												1.5	3.5	59		
														75		
下京惣構	京都府	○	○	−	15 世紀後半	−	その他型	−	−	−	箱堀	6.5	2	−	土塁の構造は不明。	石崎 2014 b，京都市埋蔵文化財研究所編 1984
山科本願寺	京都府	○	−	文明 10 年（1478）	永正初年（1504）頃	浄土真宗	寺院型 B	6	12	−	−	−	−	−		馬瀬 2015，京都市埋蔵文化財研究所編 2005，中居 2014 c
								5〜6	18	−	−	1.4〜5	5〜12	−		
								3.7	8.5	−	−	4.8	10〜11	−		
本國寺	京都府	○	○	14 世紀中頃	16 世紀前半	法華宗	寺院型 B	−	−	−	−	6	2	−		石崎 2014 c
高屋城	大阪府	○	廃城	15 世紀後半	不明	畠山氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−		小谷 2015 a
飯盛山城	大阪府	−	−	16 世紀前半	−	三好氏	−	−	−	−	−	−	−	−		中西 2015 a
池田城	大阪府	○	−	16 世紀初頭	16 世紀中頃？	池田氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−		田上 2003
小谷城	滋賀県	△	△	大永 4 年（1524）以前	16 世紀中頃	浅井氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	北村 2002
堺	大阪府	○	○	−	16 世紀中頃	−	その他型	−	−	−	−	8〜12	−	−	土塁の構造は不明。	堺市教育委員会編 1986，堺市教育委員会編 1991，堺市立埋蔵文化財センター編 1998，吉田 2015
								−	−	−	−	17	4.5	−		
								−	−	−	−	3.7	1.3	−		
								−	−	−	−	12.5	3.75	40		
								−	−	−	−	11.5	2.3	−		
								−	−	−	−	6.4	2	30		
								−	−	−	−	7〜8	2.65	63		

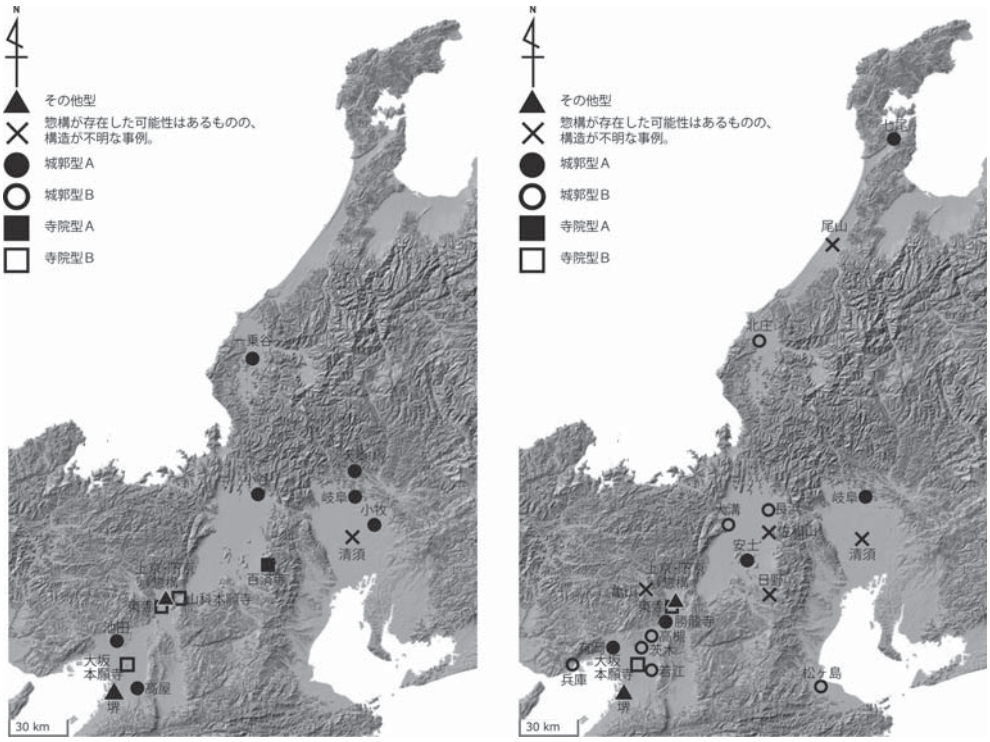
表 1　戦国期・織田政権期の惣構の構造（畿内）

名称	所在地	惣構の有無		構築年代（文献による）		中心勢力	平面プラン（縄張）による分類	土塁			堀				備考	参考文献
		戦国期・織田政権前期	織田政権後期	中心施設	惣構			高さ（m）	幅（m）	角度（°）	かたち	幅（m）	深さ（m）	角度（°）		
二条城	京都府	−	−	永禄 12 年（1569）	−	織田氏	−	−	−	−	−	−	−	−		中居 2014 a
勝龍寺城	京都府	○	○	15 世紀後半	元亀 2 年（1571）	細川氏	城郭型 A	3.5	−	−	箱堀	7.5	3.5	45		公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター編 2019
坂本城	滋賀県	−	−	元亀 2 年（1571）	−	明智氏	−	−	−	−	−	−	−	−		下高 2015
高槻城	大阪府	−	○	大永 7 年（1527）	16 世紀後半	入江氏 和田氏 高山氏	城郭型 B	−	−	−	逆台形	24	4〜5	−		中西 2015 c，鐘ヶ江・宮崎 1991
茨木城	大阪府	−	△	15 世紀後半	16 世紀後半	茨木氏 中川氏	城郭型 B	−	−	−	−	−	−	−		中西 2015 b，中井 2007，豊田 2007
若江城	大阪府	−	○	15 世紀中頃	不明	畠山氏 三好氏 ほか	城郭型 B	−	−	−	−	5	1.5	−	2 m の間をおいて 2 条検出。	小谷 2015 b， 東大阪市文化財協会編 1993
								−	−	−	−	10	1.5	−	3 条検出。	
								−	−	−	−	10	1.5	−	北方に逆茂木を検出。	
								−	−	−	−	10	1	−	2 条検出。	
長浜城	滋賀県	−	○	天正 2 年（1574）	天正 2 年（1574）	羽柴氏	城郭型 B	−	−	−	−	27	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	太田 2008， 市立長浜城歴史博物館編 2002， 森岡 1998
安土城	滋賀県	−	△	天正 4 年（1576）	天正 4 年（1576）	織田氏	城郭型 A	−	15	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。 土塁基底部幅は近藤氏が空中写真より推定（近藤 2003）。	木戸 2008，近藤 2003 坂田 2008，松下 2008
亀山城	京都府	−	△	天正 5 年（1577）	天正 5 年（1577）	明智氏	不明	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	京都府教育委員会編 2013
有岡城	兵庫県	−	○	天正 2 年（1574）改称	永正 17 年（1520）〜天正 6 年（1578）	荒木氏	城郭型 B	−	−	−	逆台形	6	2.7		大溝筋と呼ばれる堀によって 2 重になっていた。	小長谷 2005 藤本 2004，藤本 2015
								−	−	−	逆台形	6 以上	2.3 以上	70〜75	惣構内に砦あり。中堀あり。	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1997
大溝城	滋賀県	−	△	天正 6 年（1578）	不明	織田氏	城郭型 B	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	宮崎 2017
福知山城	京都府	−	−	天正 7 年（1579）	−	明智氏	−	−	−	−	−	−	−	−		京都府教育委員会編 2013
兵庫城	兵庫県	−	△	天正 8 年（1580）	不明	池田氏	城郭型 B	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	中井 2013

表 2　戦国期・織田政権期の惣構の構造（東海・北陸）

名称	所在地	惣構の有無		構築年代（文献による）		中心勢力	平面プラン（縄張）による分類	土塁			堀				備考	参考文献
		戦国期・織田政権前期	織田政権後期	中心施設	惣構			高さ（m）	幅（m）	角度（°）	かたち	幅（m）	深さ（m）	角度（°）		
東海																
大桑城	岐阜県	○	廃城	天文 4 年（1535）	16 世紀前半	土岐氏	城郭型 A	2	7	−	−	7	1.5	−		高富町教育委員会編 2001
								−	10	−	−	4〜5	1	−		
								−	−	−	V 字状	5	1.5	−	「越前堀」	
岐阜城	岐阜県	△	△	不明	天文 8 年（1539）ごろ	斎藤氏 織田氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	内堀 2008，山村 2013
清須城	愛知県	△	△	文明 10 年（1478）	不明	斯波氏 織田氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	柴垣 2014
小牧山城	愛知県	−	○	永禄 6 年（1563）	永禄 6 年（1563）ごろ	織田氏	城郭型 A	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	小野 2014，千田 1989
松ヶ島城	三重県	−	△	天正 8 年（1580）	不明	織田氏 蒲生氏	城郭型 B	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅 1993
北陸																
一乗谷	福井県	○	○	15 世紀後半	15 世紀後半	朝倉氏	城郭型 A	4.5	11〜18.5	−	箱堀	11	−	−	「下城戸」	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編 1999
								6	16	52	箱堀	12	3	40〜55	「上城戸」	
北庄城	福井県	−	△	天正 3 年（1575）	天正 3 年（1575）	柴田氏	城郭型 B	−	−	−	−	−	−	−	発掘調査が実施されていないため，構造は不明。	登谷 2017
七尾城	石川県	△	○	16 世紀前半	16 世紀後半	畠山氏 前田氏	城郭型 A	4〜5	−	−	箱堀	6.7	1.1	−		石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター編 2020
尾山城	石川県	−	△	天正 8 年（1580）	不明	佐久間氏	不明	−	−	−	−	−	−	−	佐久間氏による惣構の特定はできていない。	石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006

（註）「惣構の有無」欄の記号については次のとおりとする。
−：発掘調査や絵図資料、文献史料から惣構が想定されていない事例。
△：絵図資料や文献史料から惣構を想定する先行研究はあるものの、惣構の遺構は検出されていない事例。
○：惣構の遺構が確認・検出されている事例。



①戦国期・織田政権前期の分布　　②織田政権後期の分布

図 8　戦国期・織田政権期惣構分布図

土塁が存在したと推定されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター編 2018，堺市立埋蔵文化財センター編 1998）。

また，安土では，戦後に撮影された航空写真から，幅約 15 m の土塁が存在したと考えられている（近藤 2003）。その規模は勝龍寺（幅約 7.5 m）より大きいものの，一乗谷（上城戸：幅約 16 m，下城戸：幅約 11～18.5 m）や山科（幅約 8.5～18 m）に比べると，大きな違いは無いことがわかる。

堀については，平面プランだけでは看取できない惣構の構造上の特徴を分析するために図 9 を作成した。このグラフでは縦軸を堀の深さ，横軸を堀の上幅とし，寺院型を□，城郭型 A を●，城郭型 B を○，その他型を▲として示している。

グラフからは，堀の幅が 10 m 未満と 10 m 以上に分かれることが明らかとなり，一乗谷を除く城郭型 A の事例の多くは 10 m 未満に含まれ，10 m 以上には高槻や若江といった城郭型 B が含まれることが確認できた。そのことから，城郭型 A と城郭型 B の間には平面プラン以外にも相違点が存在すると考える。一方，城郭型でない事例（堺や山科）の堀は，城郭型 B よりも前の時期に構築されたと考えられているが，幅 10 m 以上の事例も確認されているなど，多くの城郭型より，規模が大きいという特徴がある。

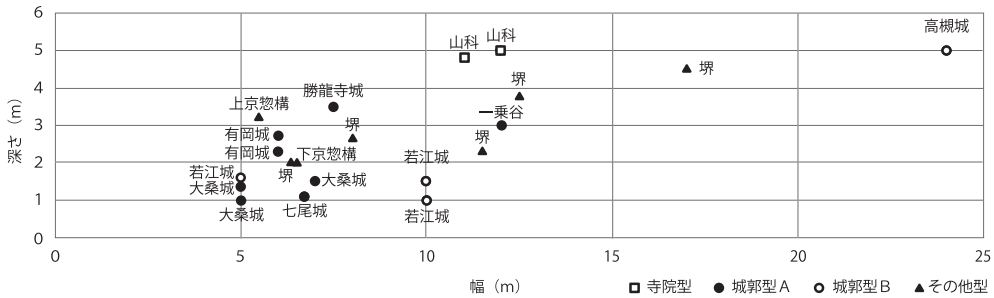


図 9　堀の規模の比較

(3) まとめ

惣構の構築年代や分布，平面プラン，土塁・堀の規模と構造からは，次のことがわかる。

戦国期から織田政権前期にかけて，寺院や町衆などを中心に，城郭型よりも規模の大きな惣構を構築していた。

城郭型の構造は，戦国期・織田政権前期と織田政権後期で変化している。織田政権の事例に着目すると，朝倉氏の一乗谷や土岐氏の大桑，斎藤氏の井口などの惣構をふまえて，城郭型 A を構築していることから，織田政権が独自の惣構をつくり出したのではなく，周囲の城郭から城郭型 A の惣構を導入したと想定できる。一方，城郭型 B の構築では，織田政権が他の勢力に比べ，構築開始時期が遅れているとはいえない。また，織田政権の勢力圏内で構築されていることから，織田政権がその成立に大きく関わっていると考える。ただし，畿内には寺院型 B やその他型の事例が存在したことから，織田政権は独自の惣構をつくり出したのではなく，畿内に存在していた事例を城郭に導入した可能性が高い。また，織田政権で城郭型 B が構築された時期においても，織田信長の拠点をはじめ，一部の城郭では引き続き城郭型 A が構築されていた。

4. 考　察

本節では，前節での分析結果をもとに，平面プランと土塁や堀の規模・構造から，織田政権の惣構の特徴について考察する。

(1) 平面プランの変化

仁木氏は，畿内の城郭で確認される 360 度周囲を囲郭するタイプの惣構が，織田政権においては構築されなかったと評価している（仁木 2002）。しかしながら，戦国期・織田政権前期までの畿内の惣構の多くは，仁木氏が指摘する 360 度周囲を囲郭するタイプではなく，一方向に設けられたものであった。このことから，畿内において発展した惣構が織田政権以降の惣構に影響を与えるとする，仁木氏の研究成果を一部改める必要がある。

惣構の構築年代の分析からは，織田氏が上洛した永禄 11 年（1568）以降，惣構の平面プランが変化したことがわかり，永禄 12 年（1569）の旧二条城築城が大きな画期であったと考える。

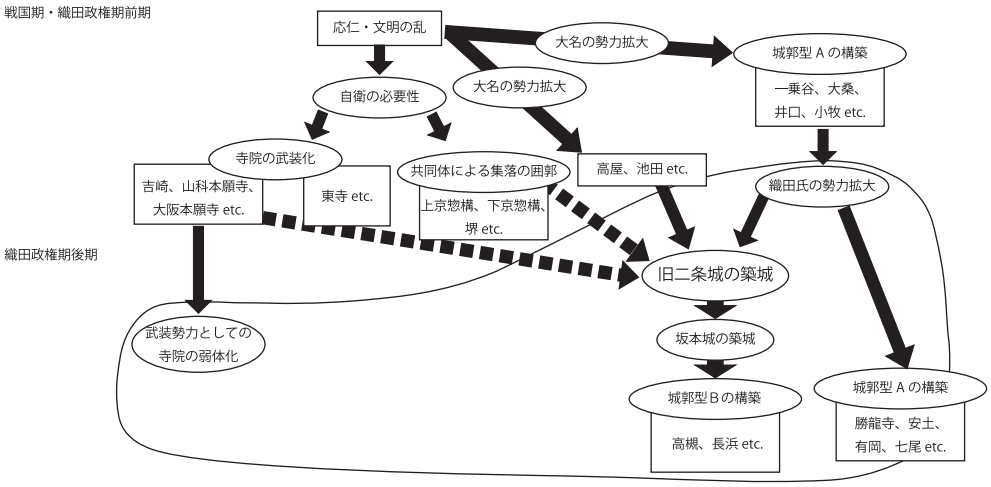


図 10　惣構の変遷とその背景

戦国期以前の洛中の平地には，足利氏の邸宅といった館は存在したものの，城郭のような防衛施設は築かれておらず，応仁・文明の乱においては，防衛力を高めるために，御構[13]と呼ばれる施設が新たに構築された。また，前節での分析からは，旧二条城築城以前の畿内の城郭では，城郭型 B がほとんど構築されていないことが明らかとなっている。このような背景をふまえると，旧二条城を築城し防衛力を高めるにあたって，畿内の城郭のみならず，上京・下京惣構といった周囲の防衛施設の存在や構築技術が大きく影響を及ぼした可能性がある。

また，旧二条城は，発掘調査によって巨大な堀が確認されており，その築城には，近隣諸国から多くの労働者を集め，当時としては大規模な工事がおこなわれたとされる。このことから，旧二条城は邸宅のような構造ではなく，平地において十分な防衛力を有した城郭であったと想定できる。旧二条城における惣構の有無は不明であるが，この築城によって，広範囲を囲む土塁・堀を平地に構築するという築城技術を得た織田政権は，旧二条城築城以降，織田氏と足利氏に仕えていた明智光秀による坂本城の築城をはじめとして，平地に城郭を築くようになる。そして，羽柴秀吉の長浜城や柴田勝家の北庄城においては，惣構が構築されるまでに発展した。

つまり，足利氏の上洛を支え，旧二条城の築城に関わった，織田政権を中心とする勢力が，畿内の寺院や自治都市などの技術・構造を城郭に導入したことで，惣構型 B は成立し，その際の築城技術や城郭構造を応用することで，織田政権の城郭を中心に城郭型 B が展開していった。以上に述べてきた，戦国期・織田政権期における惣構の変遷とその背景を整理すると，図 10 のようになる。

(2) 土塁・堀の規模と構造

土塁については，現存する事例が限られるため，規模や構造の比較は十分にはできない。

しかしながら，土塁の有無を調査することで，惣構が防衛施設または遮蔽施設としての機能を有していた可能性を検討することができる。とくに，上京・下京惣構と堺に土塁が存在した可能

性があることからは，これらの事例が単なる溝として機能していたのではなく，防衛施設または遮蔽施設であったと考えることができる。

織田政権以外の事例を含む城郭型 A の堀の比較からは，織田政権の事例と他の事例との相違点はほとんど確認できない。つまり，城郭型 A の堀においては，織田政権の独自性は看取できない。一方，寺院型やその他型と比較すると，城郭型 A の堀の規模が，山科や堺の環濠に比べて小さいことがわかる。

城郭型 B の事例では，豊臣政権期以降に改修された事例が多いため，織田政権期における事例の比較は困難である。一方，発掘調査によって織田政権期の堀の規模が確認された事例からは，堀幅が城郭型 A よりも広いことがわかる。また，滞水の痕跡から城郭型 A と比較すると，ほとんどの事例が空堀であった城郭型 A とは異なり，城郭型 B では水堀が採用されていた可能性がある。

土塁・堀の検討からは，城郭型 A では段丘などを利用し，土塁・堀の構築は最小限だったが，城郭型 B では土塁・堀が城と城下町の周囲をめぐり，その規模や構造も変化したことがわかる。城下町の発展や，織田政権が経済を重視したことをふまえると，惣構が防衛施設・遮蔽施設以外の機能も有するように変化していったと考えられる。ただし，これらの惣構の堀からは，運河として使用されていたことを証明する遺物は検出されておらず，具体的な機能については不明である。

お　わ　り　に

発掘調査数の問題もあり，考古学の視点から，惣構を構成する土塁・堀について十分に分析することはできなかったが，本稿では，発掘調査の成果や地形から，平面プランを再評価した上で，織田政権期の惣構を比較し，その特徴について考察してきた。とくに，有岡や池田，高屋などの事例を，人工施設が構築されている部分から再評価したことで，従来の研究とは異なる，新たな知見を得ることができたと考える。

また，惣構の分類においては，城郭だけでなく，寺院や自治都市などにも焦点をあてたことで，先行研究では検討されていなかった城郭・寺院・自治都市といった各視点を含む，新たな分類を提示した。この分類によって，先行研究では直接関連づけることができなかった，城郭と寺院，自治都市などの惣構を比較することが可能となった。

その結果，次のことが明らかになった。

戦国期・織田政権前期の織田氏の城郭では，周辺地域の事例に類似した惣構を構築し，その土塁・堀の規模も，同時期の他の事例とは差異がない。

織田政権後期になると，それまでの惣構とは構造が異なる事例が，平地の城郭を中心に構築されている。したがって，織田政権は，旧二条城の築城によって新たな惣構を構築する技術を獲得したと考えられるが，戦国期・織田政権前期以前の畿内の城郭で，城郭型 B にあたる惣構はほとんど確認されていない。そのことから，旧二条城の築城にあたっては，畿内の城郭における惣

構の影響を受けたのではなく，畿内の平地に発達した，寺院や自治都市などの惣構の影響を強く受け，それらを城郭に対応するように変化させた可能性が高い。

このように，本稿では，発掘調査の成果を利用して各事例を再評価することにより，旧二条城築城の前後において惣構の平面プランが変化したと評価した。また，土塁や堀の規模・構造の比較を実施したことで，戦国期・織田政権前期と織田政権後期では，平面プラン以外でも変化があったことを明らかにした。とくに，城郭型 B の堀の規模・構造を見ると，城郭型 A とは堀の幅や滞水の有無で異なっていることがわかり，織田政権が惣構の機能を城下町の立地や性格に合わせて変化させた可能性が高い。

以上の分析と考察からは，平地において周囲を囲繞する城郭型 B を織田政権がつくりあげたことで，平地における欠点を惣構が補い，その結果として，城郭と城下町の立地が山間部や丘陵上から平地へと変化したと考える。

惣構の研究は，城下町を権力者の視点から復元することを可能とし，中世・近世の政治・社会構造の解明に繋がる。今後は，豊臣政権期における事例の特徴についても，平面プランや土塁・堀の構造から検討し，本研究の成果を踏まえた上で，両時代の事例を比較し，惣構の変遷過程と，その当時の政治・社会構造の解明をおこないたい。

注

⑴ 本稿では，永禄 6 年（1563）の小牧山城築城から天正 10 年（1582）の本能寺の変までの，織田信長とその一族，家臣団が独自の城郭を構築・改修した期間を織田政権期とする。

⑵ 福島克彦氏によると，史料上の用語としては，城郭では外城や外構といった表記が用いられ，「惣構」の表記は天正 12 年（1584）以降と指摘されている（福島 2002）が，本稿では，惣構を研究上の用語として使用し，戦国期以降に集落を囲繞・区画するものを全て惣構と表記する。ただし，惣構の所在地の関係から，個別名称を用いた場合の方が適切と考える事例（京都に構築された御構や上京惣構，下京惣構，御土居など）については，惣構で統一はしない。
本稿での惣構の表記の仕方については，構は動詞「かまえる（構）」の連用形の名詞化であるため，送り仮名はつけない。また，小田原城では，近畿地方の惣構と区別するために，「総構」と表記しており，近畿地方の事例を「総構」と表記することは誤解を招く恐れがあるため，本稿では史料における初見（『東寺百合文書』ち「廿一口方評定引付」文明 12 年）で用いられている，総の旧字体“惣”を使用する。

⑶ 惣構の定義として，防御施設を指すものと，内部空間を示す定義が存在する。本研究では，寺院などに存在した“構”をひとつに囲繞した施設として，惣構の用語が用いられ始めたことを踏まえ，惣構を，囲繞された内部空間ではなく，集落を囲繞・区画した堀や土塁と定義する。城郭などの，中心施設のみを囲繞する堀・土塁と区別するために，寺内町や城下町を含む集落を囲繞または区画していることを定義に含める。

⑷ 城郭の構造上の特徴など，当時の社会文化的・技術的な水準から，本稿では，近江国を畿内に含める。

⑸ 惣構を研究する上では，その内部・外部に居住した住民がどのような身分であったかを検討することも重要である。しかしながら，織田政権期においては，兵農分離を柱とする近世的な身分制が十分には確立されていないため，本研究では，居住者の身分を対象としない。

⑹ 掻きあげ土塁は掘りあげた土砂をそのまま積み上げたもの，敲き土塁は掘りあげた土砂を敲き固めたもの，版築状土塁は①堀を掘り，堀底の城内側に杭を打つ，②土塁の壁面にパネル板を貼り，土塁の

外側塁壁面上部までパネル板をつくる，③粘土や岩つぶ・赤土，腐蝕土，礫・砂を数センチから数十センチの厚さで突き固める，④パネル板をとりはずし，板のあった面を強固に突き固めたもの，版築土塁はパネル板を土塁の外側塁壁面だけでなく，内側塁壁面にも設け，板に挟まれた内側に土砂を突き固めたもの，混合土砂版築土塁は版築土塁の構築と同様にパネル板を組みあげたのち，粘土や石灰質の土を中心に砂・礫・赤土を練り混ぜ合わせた土砂を入れていくもの，削り残し整形土塁は岩盤面が露呈する丘や山において土塁や櫓台にあたる部分を削り残して構築したものである（西ヶ谷 1994）。

⑺ 惣構は一般的に，防衛施設としての印象が強いが，時期や地域によっては，そのような機能が必ずしも確認できない事例も存在する。惣構論を提起する第 1 段階である本稿の分類では，防衛施設としての機能面について深くは検討せず，構造物としての惣構を全体的に捉える。

⑻ 山本雅和氏の研究では，中心施設といった表現を用いず，居館・寺院や集落などと分類していた。しかしながら，その表現では，居館や寺院と集落が一体化した事例には対応することができない。そのため，本稿では城郭や寺院などを惣構の中心施設として示す。中心施設について，前川要氏は「居館など階層的に卓越した空間（核）が存在すること」が惣構を定義する上で必要あると指摘し，その有無から惣構と中世集落を分けている（前川 2001）。しかしながら，本稿では集落の周囲を囲繞する土塁や堀を惣構と定義するため，中心施設は構築集団を明らかにする上で比較の対象とするものの，その有無から惣構とそれ以外と分けることはせず，惣構のひとつとして分類する。

⑼ 本稿では，出入口周辺部との対比として，「周囲を囲繞」としており，360 度すべてを囲繞していない事例についても，出入口周辺部以外に惣構の人工施設が構築されている場合は，②の事例とする。

⑽ 寺院の惣構および城郭との関係については，今後，別稿にて再検討したい。

⑾ その他型はさらに細分することが可能であると考えるが，本稿の研究目的から離れてしまうため，別稿にて検討する。

⑿ 環濠都市においては寺院が中心施設と評価されることもある（藤岡 2019）が，寺内町ではなく，寺院の影響力が不明であるため，寺院型とは区別する。

⒀ 土塁や柵，堀などから構成された防衛施設と考えられているが，発掘調査からは御構と比定できる遺構は確認されていない。

引用参照文献

石川浩治 2003「八幡城跡」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 2 集（岐阜地区・美濃地区）岐阜県教育委員会 pp.166-167

石川県教育委員会編 2002『石川県中世城館跡調査報告書』Ⅰ（加賀Ⅰ・能登Ⅱ）

石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター編 2020『七尾市　七尾城跡Ⅰ一般国道 470 号改築（七尾氷見道路）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006『よみがえる金沢城－450 年の歴史を歩む－』石川県教育委員会

石崎善久 2014 a「上京遺跡（上京構え跡）」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.211-216

石崎善久 2014 b「下京遺跡（下京構え跡）」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.237-240

石崎善久 2014 c「本國寺城跡」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.271-273

伊丹市教育委員会編 2008『有岡城跡・伊丹郷町遺跡　第 316 次調査』現地説明会資料

伊丹市立博物館編 2011『有岡城から伊丹郷町へ－落城・復興・繁栄への道のり－』解説資料 62

伊丹市教育委員会編 2012『兵庫県伊丹市　有岡城跡発掘調査報告書 XⅥ－第 315 次調査－』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第 39 集

伊丹市教育委員会編 2013『兵庫県伊丹市　有岡城跡発掘調査報告書 XⅦ－第 240 次調査－第 265 次調査－

第 334 次調査－』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第 40 集
伊丹市教育委員会編 2019『兵庫県伊丹市　有岡城跡発掘調査報告書 XXⅢ－第 352 次調査－』46
伊丹城跡調査団編 1979『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ』伊丹市文化財調査報告書　第 10 集
内堀信雄 2008「井口・岐阜城下町」『信長の城下町』高志書院 pp.59-76
内堀信雄 2009「岐阜城の空間認知～文献・絵図・考古資料を用いて～」『金大考古』金沢大学人文学類考古学研究室 64 pp.13-21
内堀信雄 2014「濃尾地方の総括」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.49-58
内堀信雄 2020「織田氏の城，小牧山城・岐阜城」『織田信長の城郭』戎光祥出版 pp.122-128
馬瀬智光 2015「山科本願寺」『近畿の名城を歩く　滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館 pp.218-221
馬瀬智光 2018「洛外における堀の変遷」『京都市文化財保護課研究紀要』創刊号 pp.145-186
宇留野主税 2014「堀・堀内障壁〔障子堀〕」『中世城館の考古学』高志書院 pp.33-46
太田浩司 2008「長浜城下町」『信長の城下町』高志書院 pp.139-160
大津市歴史博物館編 2007『戦国の大津－天下統一の夢，坂本城・大津城・膳所城－』
小都隆 2020『考古学から探る郡山城－城館が語る安芸の中世－』溪水社
小野均 1928『近世城下町の研究』至文堂
小野友記子 2014「小牧山城と小牧城下町」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.15-25
小野友記子 2020「小牧山城の石垣」『織田信長の城郭』戎光祥出版 pp.97-121
小長谷正治 2005「有岡城大溝筋堀跡と地割－惣構え成立過程の検討－」『地域研究いたみ』34 伊丹市役所 pp.124-145
鐘ヶ江一朗・宮崎康雄 1991「高槻城三ノ丸跡」『高槻市文化財年報　昭和 63 年・平成元年度』高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター pp.4-8
川越光洋 2014「戦国城下町一乗谷と府中守護所－特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の近年の発掘調査成果と今後の課題－」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.205-209
北村圭弘 2002「小谷城下町の形成過程－小谷城下町の復元的研究 3－」『紀要』10 滋賀県立安土城考古博物館 pp.1-24
木戸雅寿 2008「安土山と安土山下町－織田信長が目指した形－」『信長の城下町』高志書院 pp.113-136
岐阜県教育委員会編 2003『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 2 集（岐阜地区・美濃地区）
岐阜県教育委員会編 2004『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 3 集（可茂地区・東濃地区）
京都市埋蔵文化財研究所編 1984『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概報』
京都市埋蔵文化財研究所編 2005『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-3
京都府教育庁指導部文化財保護課編 2013『京都府中世城館跡調査報告書』2－丹波編－京都府教育委員会
京都府教育庁指導部文化財保護課編 2014『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会
京都府埋蔵文化財調査研究センター編 2018『京都府遺跡調査報告集』第 176 冊
京都府立総合資料館編 1990『東寺百合文書　ち函第七分冊』
小谷利明 2015 a「高屋城」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.86-91
小谷利明 2015 b「若江城」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.80-83
近藤滋 2003「安土城下町の再考」『研究紀要』9 安土城郭調査研究所 pp.1-18
堺市教育委員会編 1986『堺環濠都市遺跡発掘調査報告－堺市甲斐町東 4 丁目　SKT 85 地点－』
堺市教育委員会編 1989『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書　SKT 169 地点－堺市新在家町東 1 丁 11-1, 2－』
堺市教育委員会編 1991『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－堺市甲斐町東 5 丁目　SKT 246 地点－』
堺市立埋蔵文化財センター編 1998『①環濠都市遺跡②環濠都市遺跡』堺市文化財調査概要報告 71

堺市博物館編 2010『よみがえる中世都市　堺－発掘調査の成果と出土品－』
坂田孝彦 2008「考古学からみた安土城下町の構造」『信長の城下町』高志書院 pp.77-96
佐々木健策 2010「城下町の区画－相模小田原を例に－」『都市を区切る』中世都市史研究 15 山川出版 pp.33-57
佐々木建策 2014「城郭を囲うもの－惣構とは何か－」『中世城館の考古学』高志書院 pp.11-24
佐々木健策 2014「城下町小田原の都市研究と今」『戦国武将と城　小和田哲男先生古希記念論集』サンライズ出版 pp.280-289
滋賀県日野町編 2009『近江日野の歴史』2 中世編
滋賀県文化財保護協会編 2010『滋賀県立安土城考古博物館第 40 回企画展　財団法人滋賀県文化財保護協会設立 40 周年記念展　戦国の琵琶湖－近江の城の物語－』財団法人滋賀県文化　財保護協会
柴垣哲彦 2014「清須－最新の調査成果」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.5-14
下高大輔 2015 a「佐和山城」『近畿の名城を歩く　滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館 pp.70-75
下高大輔 2015 b「坂本城」『近畿の名城を歩く　滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館 pp.140-144
市立長浜城歴史博物館編 2002『秀吉の城と城下町－近世城下町のルーツ・長浜』
新谷和之 2014「近江における守護所・戦国城下町の展開－観音寺を中心に－」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.59-66
鈴木正貴 2014「尾張からの問題提起－尾張守護所の変遷からみた研究課題－」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.26-38
千田嘉博 1989「小牧城下町の復元的考察」『ヒストリア』123 大阪歴史学会 pp.36-51
千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
千田嘉博 2013『信長の城』岩波書店
高木晃 2014「福光，井口・岐阜」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.39-48
高田徹 2004 a「岩村・苗木・金山城下町について」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 3 集（可茂地区・東濃地区）岐阜県教育委員会 pp.235-248
高田徹 2004 b「岩村城跡（霧が城跡）」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 3 集（可茂地区・東濃地区）岐阜県教育委員会 pp.168-169
高田徹 2004 c「金山城跡」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 3 集（可茂地区・東濃地区）岐阜県教育委員会 pp.121-122
高田徹 2004 d「苗木城跡」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第 3 集（可茂地区・東濃地区）岐阜県教育委員会 pp. 128-129
高富町教育委員会 2001『大桑城下町遺跡』
高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅 1993『図版　日本都市史』東京大学出版会
田上雅則 2003「畿内惣構えに関する素描－池田城跡を中心として－」『関西大学考古学研究室五拾周年記念　考古学論叢　下巻』pp.1103-1125
多田暢久 2008「姫路城下町」『信長の城下町』高志書院 pp.183-200
續伸一郎 2003「戦国時代の自治都市　堺－発掘調査からみた堺環濠都市遺跡－」『戦国時代の考古学』高志書院 pp.71-82
土山公仁 2020「岐阜城とその城下」『織田信長の城郭』戎光祥出版 pp.129-136
登谷伸宏 2016「中近世移行期における大野城下町の形成について－織豊系城下町の成立に関する覚書－」『建築史学』建築史学会 66 pp.2-23
登谷伸宏 2017「北庄城下町の空間構造について－織豊系城下町としての位置づけをめぐって－」『建築史学』建築史学会 69 pp.2-21
豊田裕章 2007「茨木城・城下町の復元案と廃城の経過」『よみがえる茨木城』清文堂出版 pp.81-113

中居和志 2014 a「旧二条城跡」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.222-224
中居和志 2014 b「教王護国寺（東寺）境内」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.273-276
中居和志 2014 c「山科本願寺跡」『京都府中世城館跡調査報告書』3－山城編 1－京都府教育委員会 pp.341-346
中井均 2007「茨木城の機能と構造」『よみがえる茨木城』清文堂出版 pp.1-80
中井均 2013「城郭史からみた兵庫城」『ヒストリア』240 大阪歴史学会 pp.18-23
中井均 2020「吉崎御坊の構造－縄張りの視点から見た現地遺構－」『中世城館の実像』城館研究叢書Ⅰ高志書院 pp.251-262
長岡京市埋蔵文化財センター編 2019『長岡京市文化財調査報告書』第 73 冊　岡京市教育委員会
中嶋隆 2006「小牧」『守護所と戦国城下町』高志書院 pp.205-214
中嶋隆 2008「小牧城下町」『信長の城下町』高志書院 pp.33-58
中西裕樹 2014「畿内の守護所とその周辺－摂津・河内国の事例から－」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.223-230
中西裕樹 2015 a「飯盛山城」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.74-79
中西裕樹 2015 b「茨木城」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.42-43
中西裕樹 2015 c「高槻城」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.30-33
仁木宏 2002「近世社会の成立と城下町」『日本史研究』476 日本史研究会　pp.51-67
仁木宏 2008「「信長の城下町」の歴史的位置」『信長の城下町』高志書院 pp.275-304
仁木宏 2014「守護所・戦国城下町の空間構造と社会の全体構造」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.123-132
仁木宏 2015「大坂本願寺」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.66-69
西尾克己 2003「出雲・富田城とその城下町」『戦国時代の考古学』高志書院 pp.127-136
西ヶ谷恭弘 1994「土塁構築法の編年化試論－関東の発掘成果事例を中心に－」『城郭史研究』14 日本城郭史学会 pp.33-51
東大阪市文化財協会編 1993『若江遺跡第 38 次発掘調査報告』
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1997『有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ』兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会編 1999『有岡城跡・伊丹郷町発掘調査実績報告書』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編 1999『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ　第 35 次　第 56・85 次　第 61・62 次調査』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福島克彦 2002「「惣構」の展開と御土居」『【もの】から見る日本史』青木書店 pp.73-104
福島克彦 2014「上京・将軍邸」『守護所シンポジウム 2@清須　新・清須会議　資料集』新・清須会議実行委員会 pp.231-237
藤岡英礼 2019「近畿の環濠集落」『近畿の城郭』戎光祥出版 pp.312-323
藤本史子 2004「中世都市伊丹の考古学研究」『ヒストリア』188 大阪歴史学会 pp.1-30
藤本史子 2015「伊丹城（有岡城）」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.130-133
藤原武二・南洋一郎 1990「一乗谷朝倉氏遺跡」『福井市史』資料編 1 考古　福井市 pp.396-489
振角卓哉 2015「中野城」『図解　近畿の城郭』Ⅱ戎光祥出版 pp.87-89
前川要 2001「「惣構」の成立と展開」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』日本史研究会 pp.61-69
松下浩 2008「安土城下町の成立と構造」『信長の城下町』高志書院 pp.97-112
丸山雄二 2002「長浜城下町を掘る」『秀吉の城と城下町－近世城下町のルーツ・長浜』市立長浜城歴史博物館 pp.73-75
宮﨑雅充 2017「大溝城」『図解　近畿の城郭』Ⅳ戎光祥出版 pp.72-75

宮本雅明編 2000『朝日百科日本の国宝　国宝と歴史の旅 5 城と城下町』朝日新聞社
森岡栄一 1998「3 章長浜築城　2 長浜築城と町づくり」『長浜市史 2　秀吉の登場』長浜市役所 pp.275-318
山県市教育委員会編 2005『大桑城下町遺跡 II　大桑市場遺跡』
山村亜希 2013「岐阜城下町の空間構造と材木町」『愛知県立大学日本文化学部論集　第 5 号（歴史文化学科編）』愛知県立大学日本文化学部 pp.1-28
山本雅和 1996「中世京都の堀について」『研究紀要』2 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 pp.61-88
山本雅和 2003「京都の戦国時代」『戦国時代の考古学』高志書院 pp.43-60
矢守一彦 1958「近世城下町プランの発展類型：序説」『史林』史学研究会 41 pp.561-580
吉田豊 2015「堺環濠」『近畿の名城を歩く　大阪・兵庫・和歌山編』吉川弘文館 pp.102-105
六甲山麓遺跡調査会　有岡城跡発掘調査団　浅岡俊夫編 2003『有岡城跡発掘調査報告書Ｘ－大 11 次～第 16 次・第 18 次～第 22 次調査の概要－』伊丹市教育委員会

図版出典

図 1, 9, 10　筆者作成
図 2　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編 1999，市立長浜城歴史博物館編 2002 をもとに陰影起伏図（国土地理院）を加工して作成
図 3　京都市埋蔵文化財研究所 2005 を一部加筆
図 4　①伊丹市教育委員会 2019 を一部加筆
　　②陰影起伏図（国土地理院）を加工して作成
図 5　①市立長浜城歴史博物館編 2002 を一部加筆
　　②陰影起伏図（国土地理院）を加工して作成
図 6　高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅 1993 を一部改変
図 7　堺市博物館編 2010 をもとに陰影起伏図（国土地理院）を加工して作成
図 8　陰影起伏図（国土地理院）を加工して作成

（関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程）